『国語学辞典』編集ところ〴〵

桐原徳重

やっと『国語学辞典』の正誤表の資料ができあがった。組み直したり象眼したりして、正誤表としてできるのは四月の中ごろだろう。この辞典が予期以上に世に迎えられたことを思うと、少しは責めをつぐなうことになる。ほうっと深いためいきの出る思いだ。

昨年は、国語学会の国語学辞典が八月に刊行されました。学会に寄与するための、この三年来の仕事にたずさわった一人として、喜びと名誉と責任とを深く感じています。

これは、林大君から来た年賀状に述べてあったことである。この辞典の編集に当った人たちの気持を、まことにぴったりと表わした文章である。

あの愉快な思い出を、今年もまた新たにしたいものです。

これは、阪倉さんからもらった、ことしの年賀状の添え書きである。編集委員として事に加わった人たちの気分を、よくとらえた文章である。

ところで、林君の文の中にある「学会」の「会」の所だが、そこを「界」と筆でぬりつぶして、その横に、

原稿ハ界ト書イタノダ！

サッソク誤植ダ!!

と断ってある。これは、編集委員会が足かけ三年間、常に持ち続けてきた、はりつめた神経のなごりと見ていい。林君が年賀状のすべてに、このように断り書きをしたとは思われない。彼のきちょうめんな性格からすれば、あるいはしたかもしれないが、したとしても、「界」とぬりつぶしたくらいであろう。私にこう断ってきたのは、私のために言うならば、彼の一種の排泄作用にほかならない。桐原という男は、こうした小さなことをもって、林は狭い学会のことしか考えていない、というような難くせをつけやすい人間であるから、あらかじめ封じこめておこうと考えて、そのために書いたのではない。辞典が出てから、思いやりのない陰口が聞えてきた。彼は一時、気の毒なくらいに、いら〳〵していた。そして、私の所にやってきては盛んにこの排泄作用をしたものだ。

しかし、たとえば、国語学辞典であるのに、まだ学とは言えない範囲や項目を取り上げたのはけしからんとか、何と何とが同じスペースであるのはうなずけないとかというような見解に対しては、金田一春彦君のように、「よろしい。大いにそれを書いてもらおうじゃないか。そのあとで、こちらの言いたいことを言おう」と強気に出るのがいいと思う。

もと〳〵この仕事は、金田一・林の両君から、私に持ちかけてきたものである。そのときの口上の大体は、こうである。これに当る委員はそれ〴〵に忙しいから、一人は中心にいて専心しないと、できない。君なら、編集の経験もあるし、国文学をやった人間にしては国語に関心を持っているから最適である、と言うのである。

これは、ほめすぎている。けれども、ほめることばとして、国文学をやった人間にしては国語に関心を持っているというのは奇妙ではないだろうか。言語を道具とする文学を研究するものが、その言語についてはわりあい無関心だということが事実だから、だから、こんな奇妙な物言いがほめことばとして通用するのである。まして、外国語で育ってきた文化人に至っては、国語を外国語の品詞や文の型で考えて、それを奇妙にも思わない。そんなことで、母国語に対する愛情があると言えるだろうか。

それはとにかく、私は学生のころ、橋本先生の演習だけは敬遠したが、そのほかは全部出席した。特殊講義『助詞の研究』も一行のブランクもなしにノートして試験を受け、堂々と答案を書いたが、結果は、春彦君の保証にもかゝわらず、かんばしくなかった。彼によると、私が先生に、「『は』はやはり格助詞と認めるべきだ」と主張したからであると言う。そうかもしれない。なにしろ、私が先生に石臼という愛称を奉ったのに、国語の人たちは、てんで受けつけなかった。それほど橋本先生という存在は、こわいものだったらしい。岩淵さんによると、先生から叱られた最後の人間は私だということであるが、しかし、私には叱られたという感じが、今もって、していない。

思わず個人的な話になってしまって恐縮。ともかく同期生として卒業後も親しんできた両君にほめられたのではあり、また、「こんなことを聞くと笑われやしないか」という心配のない国文学専攻ではあり、それだけに、専門に片よってしまって多数の読者のことを忘れがちな委員会の番頭役にはかっこうだとうぬぼれて、あっさり承知したものだった。

専門家がしろうとに対して、お高くとまっていることは、その専門を恥ずかしめるものだという考えが、私にはある。たとえば、本や人の名前が漢字だけで書いてあっては、どう読んでいいかわからない。それでは何のための学問であろう。成果はすべて広く伝えるべきものであるはずだ。そこで、『法華義疏』をホッケギソと読むと、すぐにそれが国語学者は無知無学であるというレッテルばりの実証にするというようなことが起ったとする。こういうことが起ると、引き受けたのは確かにうぬぼれだったと、かなわない気持になる。もちろん、私は原稿整理の時に、エンピツで振りがなを付けていった。こんなやっかいなことを自分からしたのも、先に述べた考えからだったが、また、初校の時に必ず委員の目を通るはずだという安心もあったから、この辞典で学んでいく人々のために、あえて国語学にしろうとである自分の知識では読めそうにないものに振っていった。それがたま〳〵委員の見落しによって千に一つは残る。残ったものについては執筆者はしゃくにさわる。なにしろ各項目は、すべて執筆者の署名入りである。世間から見れば、執筆者の無知とされてしまう。これは、やりきれたものではない。そ

こで、「国語学者なんて……」という編集委員への怒りとなる。もっとも千万な話である。ところで、委員にしてみれば、これも、たまらない。私がやったことで、とんでもない罰を食らうわけである。こうしたことで御迷惑をおかけした方々には、心から謝意を表するとともに、そうした学問的な問題は、たとえばこの雑誌などが研究ノートのような欄を作り、気軽に話し合うようにすれば、私のやったことが、けがの功名式に学問の進歩と普及に役立つのではないかと思うが、いかゞでしょう。

また、たとえば『仮名本末』である。「字」であって、「名」ではないと、校正の時に私は断り書きまでしたのだが、なぜか「名」で出版されてしまった。つきつめていけば、だれが責任者であるかがわかるだろう。しかし、私はそれをしなかった。困難な文選や植字を、よくやってくれたという手がらで棒引きにしようというのではない。そういう誤りがないかどうかを、最後まで確かめなかったのは、やはり私の責任だからである。

金田一君や林君とともに嘆き合ったことだが、どうも私たちは出版屋泣かせ、印刷屋泣かせという型にはできていないらしい。だいたい、国語学辞典というような性質の出版物が、一出版社の採算にまかされるということが問題なのである。これは、真剣に打開の道を見つけなければならないことである。幸いに、採算を無視する、良心的な出版社があれば、五年でも十年でもかけて、誤りのないものを出すこともできよう。だれでもそういう幸運に恵まれるものではないし、恵まれないのが普通である。とすれば、根本的な打開の意志を持ち続ける一方、与えられた条件の中でできるだけ努力しつゝ、しかも、ぎりぎりの所でお互に泣き合うことが、現在の精いっぱいであろうと思う。

泣き合うことは、委員会では笑い合うという形で現われた。毎週月曜の午後五時三十分から、東京堂の会議室で討議したのであるが、あまりにもしきりに笑い声が聞えてくるので、社の人たちは、委員会は仕事を進めていないのではないかと心配したものだ。ところが、その翌日になると、私からこれをプリントにしてくれ、何々の用意を頼む、これ〳〵は郵便だと、どっさり出るので、東京堂の山下君も「実に驚きました」と何回も言ったくらいである。

それは一九五三年五月三十日（土）の夕方から始まった。この第一回の会議で委員の分担部門がほゞきまったのであるが、こゝですでに、「国語学辞典であるから、まだ学と言えない範囲や項目を取り上げるのはどうか」という意見が出ている。第二回は時枝先生も出席して、六月十四日（日）午後一時三十分から七時まで続いた。そこで、次のように落ち着いたのである。すなわち、国語学の辞典であることが根本であるが、学というのは体系的な学問だけをさすのではない。ことばについての意識も含まれるべきである。たとえば、普遍的方言というのは、木下順二氏の造語であるが、一国に普遍的ならば、それはもう共通語か標準語と言うべきものである。したがって、普遍的方言などという概念は成立しないなどときめてかゝるのではなくて、共通語や標準語ではなくて、方言として意識される言いまわしが現にあること、しかも、これを普遍的方言というこ

とによって、方言と標準語との関係に、なんらかの生きたつながりを見つけようとしていることなどがうかゞえるとすれば、それは国語学の辞典に取り上げなくてはならないものである。その他、例はたくさん出たが、そういう論議を尽した上での部門の選定であり、分担の決定であった。

文法部門の記述の方針について、阪倉さんから、橋本先生と言うか、つまり『中等文法』の記述によって、まず解説し、次に必要に応じて各説の違いを述べることが提案されて、そのようにきまったが、これとて、何を基準として置くかは、議論百出して、しかも、きめられない性質のものである。しかし、文法に関する国民の自覚が普及しているのは、何といっても『中等文法』である。この事実を尊重して、その人々を当面のめどとすることが根本であろう。時枝先生も、心からこの満場一致を喜んでおられた。この辞典は、現在までの成果をまとめて簡潔に示し、できれば将来への足がかりを示せばよいので、将来をしばることにあるのではない。

余談であるが、執筆依頼に中島健蔵氏をたずね、好意的な承諾を得て、辞去の靴のひもを結び終ったとき、氏は「文法の記述はどうするかね」と心配そうであった。私が、「心配するほどのことはありません」と答えたのも、右の事実をふまえていたからである。このとき氏は、「そうか。それはよかった。もっとも、各自てんでに言いたいことを言い合えば、何とかなるわけだ」とつぶやかれたが、氏は、討論会や論争と辞典とを、一瞬、ごっちゃにされたのではないかと思う。

国語史や、また今までの姿の国語学を専攻してきた人たちにとっては、『日本文学大辞典』の国語部門以上の記述がほしいであろう。そのためなら、この辞典のスペース全部をさしあげても足りない。だいいち、それだけでは、国語についての科学的な自覚を高め、実際の言語生活に役立つものにはなれないのである。生きた言語生活を高めるのに役立たないのは困る。専門家のために専門家を満足させるものも必要である。それはそれで、あってほしい。けれども、国語学会が十周年記念事業として企てたこの辞典は、それを目標にしたものではない。

この辞典の目標は、長い伝統と歴史を持った国語研究の一切を要約し、さらに最新、最高の学的成果と、それに対する異論・異説をも公正な立場において記述、紹介することである。しかして編集委員会は、広い視野に立って、言語生活・国語教育・国語問題等にも問題を求め、広く一般人に斯学の扉を開くことにした。本書が、国語学への入門の階程として利用され、今後の斯学の進むべき方向を示唆することができるならば、本学会に課せられた責務の一半を果すものと言えようか。

これは、『刊行のことば』のさわりの部分であるが、これに対して逆に「広い視野に立って」などという書き方は弱腰であるという不満も、金田一君などから出た。言語生活や国語教育、さては国字・国語問題にまで及ぼしたのは、単に広い視野という形式的なことからではない。それ以上に、質的に違った観点から取り上げたとすれば、確かに、この表現は弱すぎる。それに対して時枝先生は、「まあ、これでいい」として、大方

の批判に待つという態度を示された。この辞典では、これでいいのだ。けれども、この辞典の上に立って、これからの経験と思索と研究の結果作られるはずの国語学辞典は、もうこれであってはならないであろう。

異議や修正意見は、編集の進行中にも絶えず出された。そのつど討議され、笑い合って汲み入れられていった。しかも、委員めい〳〵は、それ〴〵の個性を存分に発揮しつゝまとまっていったのだから、まことに「愉快な思い出」に違いないのである。

こゝで、お笑いぐさまでに、当初の予定を御紹介しよう。項目選定から執筆依頼までを九月中に終り、原稿は年内、これを委員会が見るのを翌年四月までとあまく見て、それから五、六、七、八と四か月あったら、九月には刊行できるであろうとしていた。予定どおりだったのは執筆依頼までで、あとはすっかり狂って、十一か月も延びてしまったのは御承知のとおり。

さて、割当の枚数以内に必要な項目と、各項目のスペースを一覧にした委員案は、毎月曜日ごとに全体の検討にかけられていった。けれども、これではとても予定どおりに進まないし、欠席した委員の意見も反映しない。どうしたらいいかと、ひょうたんから駒の出たのが、七月十八日（土）から三泊して四日にわたる、富士の裾野の巻き狩ならぬカン詰であった。

カン詰は、これを初めとして七回もあったのだが、予定にないこのことのために、たゞでさえ乏しい編集費では、とうていまかないきれるものではない。東京堂も気ばったが、幹部委員の自腹も相当なものになった。他の委員も、でなくても少ない委員手当の中から、このためにはき出すこともあった。だから、サービスも何も、とにかく安上がりの所をと言うので、選ばれたのは、非現業共済組合連合会の保養所である。

この七月に行った所は、三島で東海道線を御殿場線に乗り換えて、裾野駅で降り、バスに揺られて十五分。七分ばかりを歩くのは畑道で、のませるような家どころか、民家の影もない。おまけに、この富士保養所というのは、南と西を幅十メートルに余る川に限られ、東と北は岩山に囲まれた一軒屋。そこへは、上甲さんは言うまでもない、築島さんや山田さんが一人で渡ってもぐら〳〵するつり橋を渡らねばならない。橋の上手にみごとな滝があって、どう〳〵としぶきを揚げ、降られ通しの四日間にはタオルもかわかないありさま。大声を出さなければ、二人を隔てると、もう聞えない。おかげでみんなの声になった。おりから、九州や紀伊の水害が記憶になま〳〵しいころであったから、「天竜川が増水のため東海道線は不通だ。腰をすえてがんばろうや」と、ラジオも聞かず新聞も読まない委員連中に、そうかと思わせるような流言を飛ばした私も、思えば罪なことをしたものだ。

保養所の人たちは、番頭さんや女中さんではなくて、非現業組合の専従者だということである。夕食のときにビール何本と注文して取っておかないと、だめだ。十二時を過ぎて、疲れ休めに一杯やろうとしても、もう何もない。「出ていこうにもいけず、幹事め、いい所を選んだぞ」と、上甲さんの丸い声を毎日聞かされた。上甲さんという人は、そのからだのごとく、ゆ

ったりと春のようで、この人がいるというだけで、どれほど一座が明るく、なごやかになったことだろう。笑い合うという委員会の特長は、上甲さんと金田一君に負うところが実に大きい。番頭役もどれだけ助かったかしれない。もう一人、逸しられないのは中田さんだ。彼が大隊長だったというそこには、みんなすっかりだまされてしまったものだ。この最初の時だって、帰るときのバスの停留所で、ふいと姿が見えなくなった。みんな心配して捜したが、ひょいと出てきた。かばんが変な形にふくれている。なんと大きな石を河原から拾ってきたと言うのである。これと最後の夜、阪倉さんが相当いけるくちだと発見したことは、その後の仕事の進行にも人間的な親しみを深めていく点にも、まことに大きな収穫であった。

この四日間に、あの辞典の全項目とその各枚数をきめた委員連中のエネルギーには、ほと〳〵感服した。よくもまあ、ねばり続けたものだ。それでもまだ足りないのか、帰りの三島駅前の食堂で、カレーライスをとりながら、執筆要領やら術語やら、思いつくまゝ、なんだかだとしゃべり立てる始末。帰ったら、各部門の五十音順項目表と部類別索引および組み見本のサンプル原稿にかゝろうやと言う。全く底く知れないエネルギーである。「だけどね、執筆者も考えなくちゃあ」と林君。「うん、選定基準を話し合おうか」と金田一君。これは、事前に漏れてはならず、頭の痛い仕事だ。

次のカン詰は九月十一日（金）から、やはり三泊四日。こんどは熱海保養所にした。それ以後は、初校を終らせた東京四谷の若葉荘のほかは、冬も春も、また夏も、この旧竜泉閣にした。東京からも京都からも便利だったからだが、たゞ熱海と聞くと、だれでもすぐ海岸通りや糸川べりを思い浮べるので、人聞きが悪くて、ちょっと閉口した委員もいた。事実は、駅からすぐガードをくゞって裏の桃山に登るのだし、サービスは組合の専従者である。おちょうしを五、六本と注文すると、五合ですかと聞き返してくることで御想像いたゞきたい。

さて、案ずるより生むがやすいと言うとおり、執筆者もこのカン詰中にきまった。東京堂の増山さんが陣中見舞に来たが、お相手もせずに仕事を進めていったので、あきれて帰っていった。あとに、執筆依頼状と執筆要領の検討だけが残ったのは、三日めの夕がた。さすがの連中もくた〳〵になっていたので、海岸通りにある、私の知合の宿屋で一杯やりながら、軽くすませるつもりで出かけた。だが、この仕事の虫の諸君は、酒と女中さんをそっちのけにして、私の出した原案をひねり回し、いじりちらし、つゝき、かじり、ひきさくこと二時間。

こうして、ともかくもできあがったが、この中でいちばん問題になったのはリライトの件であった。リライトは内容を変えるものであってはならない。けれども、この辞典の性質にふさわしくない記述をそのまゝにしておくわけにはいかない。といって、安い原稿料の上に盛りだくさんの注文をつけ、署名入りでお願いした玉稿を書き改めるという了解を、あらかじめ得ようというのだから、楽ではない。

十二月の七日（月）から原稿が集まり始め、終ったのは、予定より半年以上の、翌年七月の末である。委員と執筆者との間

の往復はひんぱんだった。書き直しや追加注文に快く応じてくれた方々には、今も感謝の気持を忘れない。中には、フランスやスイス、さてはアメリカにまで問い合わせて返事をくださった執筆者もあった。公務に忙しい委員も、ちょっとした数字のために図書館へ行ったり、本のほこりにまみれたりした。特に、リライトのことでは、柴田さん自身が他の辞典の被害者であったから、その処置を委員会に相談したような、そういうなまなましさを加えて、みんな慎重の上に神経質にさえなっていった。タフな阪倉さんでさえ、「原稿が集まればゴールだと思っていたが、実はスタートなんだね」と悲鳴をあげたほどだ。それでも事が着々と進んでいったのは、執筆者の多くの人々の快い協力、とりわけ図版などのために貴重な資料を進んでお貸しくださったり、新たに作られたりしたおかげであった。

築島さんが、思いがけないけがで三か月ばかり寝こんだほかは、委員一同、無事息災であったことも、考えてみれば驚異であった。私は、原稿をそろえ、活字の指定と表記の統一を終って、山下君に渡し、さて今夜は祝杯としようかと考えた八月二十日（金）の午後、東京堂のあの一室で胃が痛みだし、二十五日まであぶら汗を流したものだったが、しかし仕事に支障はなかった。

初校の出始めたのは九月の末であったが、この間も委員会はぼんやりしていたわけではない。付録の話は、すでに第一回の会議のとき話題に上り、その後もちょい〳〵意見が出ていたが、いよ〳〵本格的になった。それ〴〵の委員が分担したが、とりわけ国語年表や文法諸説の対照は初めての試みであり、事に当った中田さん・阪倉さん、お二人を助けて完成に尽された教育大や京大の若い人たちの苦労はたいへんなものであった。年表について賛否の意見はあろうが、学問の進歩のためには大きな便益を与えるものであることに疑いはないであろう。また、文法諸説対照表も、ページごとではなくて見開きごととしたら、もっと〳〵よかったろうと、校正が出、簡潔に表現することの苦労がわかるにつれて、残念と気がついたのだが、及ばなかった。その他、柴田さんの苦心になる外国語からの索引もあり、この付録だけを放しても便利なものになるのではないかと思うほど、多少の不備はあるにせよ、委員会が自慢していいものだと思う。

校正が付録と並行して、すべて終ったのが一九五五年の六月も終りであった。この間にエピソードも多々あるが、はしょる。校正についても多くの人々の献身的な尽力があったし、出版されてから正誤の指摘を寄せてくれた人々も少なくない。それらは、すべて生かして表に並べた。こゝに厚く御好意を謝します。

これらの好意を思うにつけ、『日本文学大辞典』からほゞ二十年ののちに出た『国語学辞典』の刊行は、全国的学会を熱望された橋本先生をはじめ有志の方々の理想を、さらに地についた、情のかよったものとするために非常に役立ったし、われわれ日本民族の母語に対する愛をしっかりと自覚する上に、大きな貢献をなすものと言ってよいであろう。

この次の国語学辞典は、十年後か十五年後か知らぬが、それにたずさわる人々は、その体験によって、この学会十周年記念

事業をしとげた編集委員会が、その乏しい物質的報酬に反比例する幹部委員の自己犠牲と、委員全体の精神的労苦の重さ・深さとを、身にしみて味わうだろう。編集幹事として従事した私は、あえてこれを予言としておきたい。

これをもって、委員諸氏を信頼して、思う存分に活躍させた委員長時枝誠記博士、副委員長遠藤嘉基博士、学会理事として励ましてくださった佐伯梅友博士・岩淵悦太郎氏・亀井孝氏、それから、私の至らなさを終始いたわり、無礼・失礼を許してくれた委員諸氏へのお礼のことばとする。

【付記】この辞典の編集が終ったら、君に国語学の単位を上げるよと委員会は言っていたが、まだだれも言わないところを見ると、どうやら落第したようである。正誤表のことを考えると、まことに当然である。そこで恥ついでに、初版のための正誤表を、再版のとは別にして、お申し越しの方にさしあげるよう話したところ、東京堂も承諾しました。四月の末ごろにはできましょうから、どうぞ御了承ください。

（一九五六・二・一七）

――『国語学辞典』編集委員会幹事――